

まほろば【校長室だより】

[文責]

校長 江口 尋信

救急救命講習(職員研修)を実施しました

9月2日(水)、日本赤十字社の方を講師に招き、気道異物除去(喉に異物が詰まった際の対処)や心肺蘇生、AEDの取り扱いなどを学ぶ校内研修会を実施しました。この研修は、毎年実施しており、ほとんどの職員がすでに経験(学習)しています。毎年同じ研修を行うことには意味があります。一つは、わたしたち職員が一定の緊張感をもち、危機意識を失くさないためです。二つは、いざという時に、落ち着いて正しい処置を行い、子どもたちの命を守るためです。

幸いにして、ここ数年、学校内で心肺蘇生を行ったり、AEDを使用したりする状況にはなっていません。長く何事もない状態が続くと、人はどうしても「めったに起こることではない」「自分たちには関係がない」という意識になり、いざという時の動き出しが鈍くなるものです。また、間違った方法で救命にあたると、助かる命も助からなくなることがあります。



喉に詰まった異物を取り除く練習

- 片手で胸を抱え込むようにして支え、もう片方の手で背中を叩きます。(手は開いて、パーの状態)
- 背中は強く叩きます。弱く叩くと、肺の空気が少しずつ抜けて、叩いても効果がなくなってくるそうです。
- 異物を取り除くため、指を口の中に入れません。異物がさらに奥へ入ったり、指を強くかまれたりするそうです。
- 異物を取り除く処置を行いながら、別の職員に、救急車を呼び、AEDを持ってくるよう指示します。

本校では、喉に詰まりやすい食材が出た時には、栄養教諭が放送を使って、子どもたちに注意を呼びかけています。また、赤十字社の先生に、普段から次のような指導を行うことが大切だと教えていただきました。【①食べながら話さない、②話すときは食べない、③食べている人に話しかけない】子どもたちにしっかり指導をしていきたいと思っています。

「ひと」とのかかわりを大切にする

夏休みに行われた太宰府中学校ブロック学校運営協議会(太宰府中学校区の保護者、地域、学校の三者による協働的な子育てを進めるための会議)の中で、本校の子どもたちの「挨拶」が課題であることが話題になりました。見守り隊の方が挨拶をしても、挨拶が返ってくる割合は大体3割程度だそうです。中には、ちらりと見て、そのまま何事もなかったように友だちと話し続ける子どももいて、少し寂しい気持ちになるとのことでした。その話を受けて、夏休み明けの全校朝会で、「誰にでも気持ちのいい挨拶をしよう」という話をしました。挨拶が苦手な人は、会釈でも構わないと話しています。それから、約2週間が経ちましたが、子どもたちの挨拶が少しずつ広がってきたように思います。「挨拶」には「心を開く」という意味があり、他者との関係づくりの第一歩です。「挨拶」や「言葉遣い」など、「ひと」とのかかわりに関することは、しっかり指導をしていきたいと思っています。このことは、厳しく注意することで挨拶させることではありません。なぜ挨拶が必要なのかを話し、頑張っている子どもを褒め、認めながら広げていきたいと思っています。皆様のご協力をお願いいたします。